

地下空間で観光振興

建築用石材「大谷石」の産地として知られる宇都宮市の大谷地区で大規模な陥没が発生して2月で30年になる。陥没後に激減した観光客は近年、地下空間を活用した観光振興で右肩上がりの回復を見せる。日本遺産認定などの追い風も吹き、新たな産業による活性化の動きも加速してきた。大谷の再興に挑む人々を追い、真の再生への課題を探った。

大谷再興

石の里の今

「地下神殿だ」「冒険みたい」。広大な地下空間がつくる幻想的な光景に多くの観光客がカメラのシャッターを切る。大谷石の採掘跡地を見学できる大谷資料館が観光客でにぎわっている。東日本大震災後に休館した資料館は2013年に営業を再開。同年の入館者数は8万人だったが、18

陥没で客数半減

「資料館再開で大谷が見直された」。資料館のオーナー、大久保恵一氏の言葉には大谷が歩んできた歴史がにじむ。大谷地区は日本最古とされる崖岸仏や特徴的な岩肌などがあり、採石業

は46万人まで増えた。突然襲ったのが採石場跡地の大陥没だ。89年2月10日に始まった陥没はその後も続き、陥没面積は最終的に約1万平方メートルになった。死傷者は出なかったが、80年代前半に10万人以上あった大谷地区の年間入り込み客数は陥没後ほぼ半減。06年には12万人まで落ち込んだ。

震災もあって観光が低迷するなか、大谷再興への機運を高めるきっかけとなったのが13年の資料館の再開だった。「負の遺産」とも呼ばれた地下空間が原動力になった。同じ年、宇都宮や日光の観光業など4社は有限責任事業組合「チキカチ計画」を設立。翌年、水のためた地下空間をボートで巡る「地底湖クルージング」を始めた。

同組合の塩田大成代表は「特徴ある採石場跡地が荒廃していくのが嫌だった。活用し、維持できる方法が観光だった」と話す。地底湖クルージングは今や、年間80回ほど開催するほぼ全ての回が定員に達し、1年に千人以上を集める大谷観光の目玉の一つになった。大谷地区の入り込み客数は13年から増加に転じ、16年に63万人まで回復した。宇都宮市は120万人に伸ばす目標を掲げ、18年に土地利用の規制を緩和するなど活性化を加速。飲食店が次々に開業している。

「負の遺産」とも呼ばれた地下空間が原動力になった。同じ年、宇都宮や日光の観光業など4社は有限責任事業組合「チキカチ計画」を設立。翌年、水のためた地下空間をボートで巡る「地底湖クルージング」を始めた。

一方、観光が回復軌道に乗るなかで課題も浮かび上がってきた。「大谷は資料館しかない」と話す関係者は少なくない。飲食・宿泊の機能が充実する一方、リピーターや長時間の滞在者を増やすための観光メニューの充実が急務になっている。200を超える廃坑など

を活用するには事業者と地域との協働が不可欠だが、情報交換は道半ばだ。塩田氏は「会ったことのない人が大勢いる。地元の人にどう存在を知ってもらおうかが課題だ」と話す。地域内外の人々が一枚岩となれるかが問われている。

観光を楽しむ大前提である安全も大きなテーマだ。陥没を受けて大谷では約100カ所に地震計を設置。予兆を検知することで安全確保を徹底している。だが人的・物的被害の有無に関係なく、陥没が起きれば観光客は遠のく。過去には、陥没の可能性をゼロにするため廃坑を埋め戻す案も出たが、意見対立で頓挫するという曲折もあった。大谷の地下空間を研究してきた宇都宮大学の清水隆文准教授は「コストの問題があるなか、どの水準の安全を求めよう確保するか。整理するのは今後の課題だ」と指摘する。

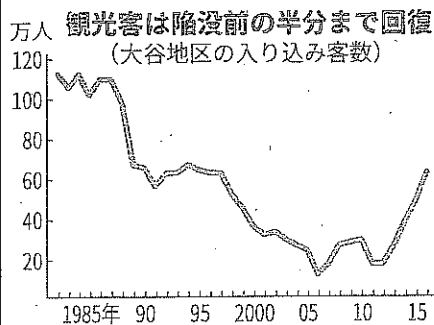
新たな目玉の発掘課題

増加に転じ、16年に63万人まで回復した。宇都宮市は120万人に伸ばす目標を掲げ、18年に土地利用の規制を緩和するなど活性化を加速。飲食店が次々に開業している。

一方、観光が回復軌道に乗るなかで課題も浮かび上がってきた。「大谷は資料館しかない」と話す関係者は少なくない。飲食・宿泊の機能が充実する一方、リピーターや長時間の滞在者を増やすための観光メニューの充実が急務になっている。200を超える廃坑など

を活用するには事業者と地域との協働が不可欠だが、情報交換は道半ばだ。塩田氏は「会ったことのない人が大勢いる。地元の人にどう存在を知ってもらおうかが課題だ」と話す。地域内外の人々が一枚岩となれるかが問われている。

観光を楽しむ大前提である安全も大きなテーマだ。陥没を受けて大谷では約100カ所に地震計を設置。予兆を検知することで安全確保を徹底している。だが人的・物的被害の有無に関係なく、陥没が起きれば観光客は遠のく。過去には、陥没の可能性をゼロにするため廃坑を埋め戻す案も出たが、意見対立で頓挫するという曲折もあった。大谷の地下空間を研究してきた宇都宮大学の清水隆文准教授は「コストの問題があるなか、どの水準の安全を求めよう確保するか。整理するのは今後の課題だ」と指摘する。



観光客は陥没前の半分まで回復 (大谷地区の入り込み客数)

(注)宇都宮市の資料より作成



観光客でにぎわう大谷資料館の地下空間

追い風も吹く。大谷石を掘り、使用する文化が昨年5月、日本遺産に認定された。11月には積水ハウスと米マリオート。

遺産認定、追い風

た。宇都宮市は120万人に伸ばす目標を掲げ、18年に土地利用の規制を緩和するなど活性化を加速。飲食店が次々に開業している。